

<オール・チャイコフスキーア・プログラム>

セレナーデ・メランコリック Op.26

「憂鬱なセレナード」の邦題で呼ばれることが多い作品。ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-93)は、有名なヴァイオリン協奏曲(1878年)の作曲前に、オーケストラ伴奏によるヴァイオリン小品を2つ書いている。1つは「ワルツ・スケルツォ」(1877年)、もう1つが本作である。1875年に当時最高の名手レオポルド・アウラーの依頼で作曲されたが、なぜかアウラーは演奏せず、1876年1月にドイツ系の奏者アルフ・プロズキーの独奏で初演された。ちなみに後のヴァイオリン協奏曲も似た経緯をたどっている。

曲(アンダンテ、変ロ短調、3/4拍子)は、哀愁漂うしみじみとした音楽。木管楽器主体の静かな序奏に続いて、ヴァイオリンが甘美で物哀しい主題を奏する。この主題がじっくりと歌われた後、若干テンポを速め、新たな旋律をもとに情熱を増していく。やがて最初の主題が戻り、消えるように終結する。

(柴田克彦)

「イオランタ」

田辺 佐保子(ロシア文学者) Sahoko Tanabe

世界で最も親しまれているロシア・オペラといえば、チャイコフスキー(1840-93)の『エフゲニー・オネーギン』(1878年)であろう。実らぬ愛と友情の悲しい行末に、苦い憂愁をかきたてられるファンは尽きることがない。他にも数多くの名作オペラを送りだした大オペラ作曲家のチャイコフスキーが生涯の最後に書いた第11作目のオペラ——それが一幕物の端正な抒情的オペラ『イオランタ』である。『オネーギン』と同様に、若い娘の愛をめぐって人間の心の不思議さが詩情豊かに描かれたオペラだが、こちらでは一日のうちに愛が豊穣な実りを見せて、生きる喜び、愛する幸福が晴れやかに歌い上げられる。

原作はデンマークの作家H.ヘルツが中世の伝説に基いて書いた劇『ルネ王の娘』(1845)。ロシアで翻訳上演されて好評を博したが、作曲家はその舞台を観る前からオペラ化を望んでいた^{*1}。帝室劇場よりバレエ『くるみ割り人形』の作曲、それと抱き合せ上演という条件での一幕物のオペラの作曲という注文を受けて、年来の希望を実現させたのである(台本は弟のモデストによる)。オペラは1891年に、バレエは翌年の1892年に完成し、その年の12月にペテルブルグのマリイン斯基劇場で初演されて好評を博した。

物語:15世紀プロヴァンスのルネ王は、盲目に生まれついた娘イオランタを深い山中の城で、彼女が盲目であることに気付かぬように育ててきた。しかし成長したイオランタ姫は、自分には何かが欠けていると不安を覚えている。ルネ王はムーア人の名医エブン=ハキアを招き、姫が許婚(父王が姫の幼時に定めたブルゴーニュの公爵ロベルト)にまみえるまでに盲目状態から救い出してほしいと依頼する。しかし医師は、姫に盲目たることを自覚させたうえで、本人が視力を得たいと望むのでなければ、治癒の見込みはないと告げ、王は決断がつかない。

そこへ許婚ロベルトとその友人の伯爵ヴォテモンが旅の途上で、ルネ王の城とは知らずに禁門の城に迷い込む。ロベルトは美女マチルダを激しく恋しているのにたいし、純真な乙女に憧れるヴォテモンはイオランタを一目見るなり魅せられる。彼女が盲目であるという事実が明らかになるが、二人の愛はその衝撃を乗り越えていく。

予想外の事態を知ったルネ王は一計を案じ、イオランタ姫の目の治癒が成功せぬならば、城に侵入する罪を犯した騎士ヴォテモンの命は無いと宣告。姫は彼の生命を救わんものと視力の獲得を熱望し、医師の治療を受ける。

従者たちを探しに出ていたロベルトが戻り、ルネ王と対面し、許嫁のイオランタ姫との破約を許され、ヴォテモンは姫への求婚が容れられる。イオランタは視力を我が物にし、まばゆい世界の美を、父王や愛するヴォテモンや人々の姿を目にする。一同は喜びのうちに光の世界の創造者である神を讃える。

音楽:不安な闇の世界にいるヒロインの心境を表す木管のみの物哀しい序奏に始まり、光の世界を得た喜びと神への賛歌を大合奏で盛り上げるフィナーレへと、管弦楽は歌唱や叙唱と繊細に響き交わして複雑な心理的展開を巧みに浮き上がらせる。また次々に繰り出されるアリア、重唱、合唱は、人物の性格と心理を簡潔につたえながらも伸びやかで、親しみやすく、旋律も美しく、歌の魅惑を堪能させてくれよう。イオランタが不安な胸中を歌うロマンス風のアリオーソ「なぜ以前にはこの悲しみを知らなかったの?」、女友達や乳母の歌う子守歌、ルネ王の嘆きと期待が歌われる威厳のこもるアリオーソ「主よ、私に非があるならば」、そして王を説諭する名医エブン・ハキアの東方的な彩りをおびたモノlogue「肉体と精神の二つの世界は」、さらに騎士ロベルトの激情的なアリア「わがマチルダに並び立つ女性がいようか?」等々。

最大の山場が、恋に落ちたヴォテモンとイオランタが二人だけで繰り広げる長いシーンだ。そこでは赤いバラと白いバラをめぐる印象的な場面をはさんで、期待から衝撃へ、不安から希望へと揺れながら、二人の愛が深い陰影をみせて、緩やかにかつ劇的に展開していく。光の世界を目にしたイオランタが感動と感謝を歌い、それに唱和して全員が愛と幸福と人生を讃えるフィナーレの素晴らしい聴きどころだ。